

日米若手研究者の交流の場としての JAMI

名古屋大学多元数理研究科

楯 辰哉

私は、2001年7月から2003年7月までの二年間、学術振興会海外特別研究員として、アメリカ、BaltimoreのJohns Hopkins大学に滞在した。学振海外研究員に応募した当時、私は、JAMI, The Japanese American Mathematics Instituteの存在を知らず、採用後にJohns Hopkins大学数学教室のホームページを見て、始めて、その活動を知った。当時は特別の感慨もなく、ただ単に「このような活動もされているんだ。日本の数学会とも、割と交流があるんだな」ぐらいの気持ちでいた。この記事に貢献することを依頼された時、そのような人間が、JAMIについての特集に記事を書くことが、はたして許されることかどうか、私には分からなかった。しかし、私自身はJAMIにとっても良い印象を持っており、できることなら、末永く続けていただきたい活動だと思っている。しかもJAMIの活動の主な場所であるJohns Hopkins大学に長期滞在させていただいた人間のできることにすれば、この特集に記事を書き、精神的な面でJAMIを支援すること以外にないと思い、快く引受けることにした。従って、以下で述べたいことは、JAMIへの個人的な思い出話等ではなく、JAMIの活動の近くにいた人間の、むしろ外部からの印象である。

私の知っているJAMIの活動には2つある。一つは、日本人若手研究者のアメリカ滞在への支援と、毎年開かれている日米共同主催の研究集会である。JAMIの支援によってアメリカに滞在し研究上多くの業績を残された方が、この特集に記事を書かれている。そこで、以下では、日米共同主催の研究集会について私の印象を述べたい。

日米共同主催の研究集会は、毎年春にJohns Hopkins大学で開かれている。私が滞在中も例外ではなく、2002年3月の「Geometry and Physics」、2003年3月の「Primes and Knots」が開かれた。これらの研究集会、並びにそれ以前以後のJAMIの主催する研究集会でどのような講演がなされたかについては、Johns Hopkins大学のホームページのJAMIの項目を訪れば知ることができるので、ここでは述べないが、それらの研究集会に部分的にはあるが参加して感じたことは、非常に刺激の強い研究集会であるということである。それはもちろん、例えば2002年の研究集会ではWittenやEliashbergが講演しているなど、きわめて著名な数学者・物理学者が参加・講演するという理由もある。しかし私にとってより刺激的であったことは、日本とアメリカの、私と同世代の研究者が多数参加・講演し、活発に議論していたこと

である。

アメリカで開かれる研究会に参加すると、自分と近い分野の研究をしている、それまで知らなかった同世代の人間に出会うことが、しばしばある。そのようなとき、比較的気楽に声をかけ、議論したり話をしたりできる。そうして、良い友人を作ることができる。また、アメリカの若手研究者にとっても、日本の若手研究者と議論の場を持つことは、有意義に感じているようである。私自身の経験で恐縮だが、ある研究会で知り合った友人が、その後自分の所属する大学に招いてくれたこともある。JAMIの主催する研究集会に参加して感じたことは、このような場所、つまり、日米の若手研究者同士の議論あるいは出会いの場を、しかもきわめて有意義な、刺激的な研究集会という形で提供してくれている、ということである。

現在では、外国人研究者が来日する機会が豊富にあり、このような議論の場は、日本にいても持つことができると考える方もあるかもしれない。しかしながら、これは私だけかもしれないし反省すべき点ではあるが、国内で開かれる国際研究会より、外国で開かれる研究会に参加する場合の方が、自分自身が積極的になっているように感じる。そして、そのような場に参加し、海外の自分と同世代の研究者と積極的に議論することにより、研究上きわめて大きな刺激を受けることができる。このような刺激は研究者にとって必要不可欠であろうし、そうした刺激を受ける場が、JAMIの研究集会という比較的利用しやすい形で存在するということは、私たち若手研究者にとって、非常にありがたいことである。

JAMIプログラムを継続させるにあたって、さまざまな問題があることと、想像する。さらに世話人の方々は、ただならぬ努力と熱意をプログラムに注がれているかと思う。そうした方々の努力にあぐらをかいているようで、大変恐縮ではあるが、きわめて刺激的な場所を若手研究者に豊富に提供している JAMI プログラムが、今後未永く存続することを願うばかりである。